全電源喪失の記憶

証言　福島第1原発

■番外編「残された人々」

4

終わらぬ安全対策

がれき撤去の重要性

大型の重機がうなりを上げ、がれきに見立てた丸太の束や巨大なタイヤを次々とどけていく。3分もすると、長さ50㍍にわたって車が通れる道幅が確保できた。東京電力柏崎刈羽原発で9月下旬、構内の高台の一角を使って大型重機の訓練が行われていた。操作するのは若手の東電所員。福島第1原発事故の教訓から、取り入れられた訓練の一つだ。

「津波が来た場合はまずがれき撤去をしなければ、次の作業に進めません。とても重要だと思っています」

ホイールローダーと呼ばれる重機の操縦席から降りてきた土木グループの沖田薫はそう話す。25歳の沖田は約2年前に大型重機操作の資格を取得、月に1回のペースで訓練を繰り返している。沖田はほかにパワーショベルなども操作でき、崩れた道路を補修する訓練も続けている。

▲ホイールローダーと呼ばれる重機でがれき撤去訓練をする東京電力柏崎刈羽原発の所員＝9月下旬、柏崎刈羽原発

第1原発事故の発生当初、原子炉注水に使われた消防車やがれき撤去のための重機を操作したのは地元の協力企業だった。東電の所員に操作できる者がいなかったのだ。

中でも重機が重要な役割を果たしたのは3号機の原子炉建屋が爆発し、高線量のがれきが散乱した2011年3月14日だった。電源復旧や原子炉注水の作業を一刻も早く再開するため、まず必要だったのががれきの撤去だった。

当時の所長、吉田昌郎は事故後、周囲に「俺が考えているよりずっと短時間で協力企業ががれきの撤去をやってくれた。重機の操作はうちの人間もできなきゃいけない、とつくづく思ったね」と語っている。

柏崎刈羽原発では、事故前に3台だった消防車を42台に増やし、重機も新たに7台配備した。高圧電源車やトレーラー式の原子炉除熱装置のほか、核燃料プールへの注水を想定した大型の生コン圧送機も3台ある。重機を操作できるよう訓練を受けた所員は約50人に上る。

津波に備えた巨大な防潮堤は海面から高さ15㍍。水が防潮堤を越えた場合に備え、建屋の重要な部分には防水工事も施された。第1原発事故で原子炉注入用の真水が足りなくなった反省を踏まえ、貯水量2万㌧のため池もつくった。

だが、こうした対策は全体の一部にすぎない。多重化する備えとともに設備はどんどん増え、対応も複雑化していく。第1原発で事故当時にユニット所長だった吉沢厚文は、安全対策に終わりはない、と話す。

「例えば世界一安全という基準があるとして、今日の時点ではそう言えるかもしれない。でも明日は違うわけです。一度つくった安全が永遠に続くと考えていること自体、間違っている。状況は絶えず変わる。人も変わる。組織も変わる。それを常に心配していなければいけないと思います」

（敬称略。共同通信　国分伸矢）